

八十四

佐々木君の祖父は七十幾つで三四年前に亡くなった。

その人が青年の頃というから、嘉永かえいくらいのことになるのだろうか。

陸中の海岸には西洋人が多数往来していたという。釜石にも山田にも西洋館が建っていた。船越半島ふなこしの突端にも西洋人が住んでいたという。

耶蘇教やそは秘密裏に信仰されており、遠野郷でも基督きりすとを奉じ、信心はりつけして磔はりつけになった者があるということである。浜に行つて異国人の様子を見て来た人は、口々に、

「異人は能く抱き合つては、嘗なめ合う者どもだ」

と言つたそうである。

今でもそうした話をする老人はいるようである。

海岸の地方では、外国人との合あひの子が中々に多いということである。

八十五

土淵村の柏崎には、両親とも正真正銘の日本人であるにも拘らず、白子が二人続けて生まれた家がある。

髪の色も肌の色も眼の色も、西洋人とそっくり同じである。

現在は二十六七になるだろうか。

地元で農業を営んでいるという。

発する声も、土地の人とは違つていて、細くて鋭いと聞く。

五十

死助しすけの山に、カッコ花という花が咲く。

遠野郷でも珍しい花である。

五月、閑古鳥かんこどりの啼く頃になると、女や子供はこの花を採りに山へ行く。

酸漿はおすまのように吹いて遊ぶ。

酢すの中に浸けておくと色が変わって、紫になる。

この花を採ることは、遠野の若者達の最も大きな愉たのしみなのである。

五十九

他の土地では河童かっぱの顔は青いと謂う。

でも、遠野の河童の面は、真っ赤である。

佐々木君の曾お婆ひいさんがまだ幼かった頃。近所の友達と庭で遊んでいた時のことである。

庭には、胡桃くるみの木が三本生えていた。

その胡桃の木の間に、真っ赤な色をした男の子の顔が覗いたことがある。

河童だったのだろう。その胡桃の木はまだ枯れず、大木になって佐々木君の家の庭に聳そびえている。佐々木家の屋敷の周囲の樹木は、全て胡桃だということである。

五十七

川岸の砂地に河童の足跡を見ることは、決して珍しいことではない。雨が降った日の翌日などには、特に能く見掛けるそうである。

その足跡は猿のそれに似ていて、親指が他の指と離れているから、形だけなら人間の手の跡のようにも見える。ただ大きさは三寸に満たない。それに、指先の方がくつきりと残らない。水掻きのようなものがある所為かもしれない。

五十八

小烏瀬川の姥子淵の近くに、新屋の家という家号の家がある。

この家の者が、ある日馬を冷やすために姥子淵へ行つた。連れて行つた馬を水に浸すと、馬を曳いて来た者は何処かに遊びに行つてしまった。

馬だけが残つた。

その間に。

置き去りにされた馬に河童が取り付いた。馬を淵の中に引き摺り込もうとしたのである。しかし馬の力は強く、河童は逆に引き摺られて陸に上がり、遂に厩の前まで連れて来られてしまった。人に見付かつてはいけないと思つたか、河童は伏せた馬槽を被つて身を覆い、隠れた。馬槽とは秣を入れる飼葉桶のことである。

新屋の家の者は馬槽が伏せてあるのを見て怪しく思つた。縁を持って少し持ち上げてみると――。

河童の手が出た。

すぐに騒ぎになり、村中の者が集まつた。

さてこの河童め、殺してやろうか、それとも赦してやろうか、と、村人達はその場で評議を始めた。

結局、今後は村中の馬に悪戯をしないと堅く約束させて放してやることになった。

その河童は、今はもう村にはいない。

姥子淵を離れて、相沢の滝の淵に移り住んだのだと伝えられている。

五十五

遠野の川には河童が多く棲んでいる。

猿ヶ石川には特に多いという。

河童は、人を孕ませる。

松崎村の川縁には、母娘二代が続けて河童の子を身籠もった家があるという。

産まれた子供は斬り刻んで一升樽に入れ、土深く埋めたそうである。

河童の子というのは極めて醜怪な姿なのだそうである。

河童の子を孕んだ女の婿というのは新張村の何某^{なにかし}という男で、この男の実家も川の端^{はた}にあるそうである。その何某本人が、妻が河童の子を宿すに至った一部始終を人に語っている。

次のような顛末であったという。

ある日の夕暮れ。家の者一同が傭仕事をしたその帰りのこと。

その家の娘——男の妻が、ふらふらと川の方に行き、汀^{うきわ}に至って蹲^{うずま}った。

娘はにこにここと笑っていたという。

翌日の午、昼食休みの最中にも娘はまた川に行き、蹲うすくまって笑う。

いったいどうしたことかと一同は訝いぶかしんだが、それだけのことであるから、これといって手の打ちようもなかった。娘に問い質しても何とも埒らちが明かない。そうしているうちに日を重ね、やがて妙な噂が立つようになった。

間男が通っているという噂であった。

その娘の許に、村の何某という男が夜な夜な通っていると謂うのである。

その噂は、真実だった。

初めのうち、情夫は婿の留守を窺って通って来ていたらしい。婿が浜の方へ駄賃付に出掛けた日などに来るのである。しかし次第に間が詰まり、終いには婿が横に寝ているというのに通って来て情を交わすようになった。何故か、防ぎようがなかった。

やがて、あの家に通っているのは河童だという評判が立った。その噂は徐々に広がり、家の者はほとほと困り果て、一族郎党が集まって娘を守ったが何の甲斐もない。

見兼ねた婿の母親もやって来て、嫁である娘のすぐ横に寝て見張ったりもしたのだが、どうしようもなかった。深夜、娘が笑う声があるので、さては来たかと身構えるが、動けないのだそうである。金縛りに遭ったように身動きが取れず、何者かが来ていることだけは判っているのだが、手の施しようがないのである。

一族の者どもは万策尽きて、為すが儘ままにするよりなかった。

やがて、娘は懐妊した。

夫の子なのか、怪しい者の子なのかは判らなかった。

月が満ち、愈々出産するに至ったが、これが難産だった。

見兼ねたある人が、

「馬槽ばそうに水を張って、その中で産めば安産になる」

と助言した。その通りに試してみると、その通り、実際に子はすぐに生まれた。

生まれたのだが――。

その赤ん坊の手には水掻きがあった。

河童の子だったのである。

実は、この娘の母もまた、若い頃に河童の子を産んだことがあったのである。間男が河童であるという噂が立ったのもその所為なのであった。これは二代や三代で終わる因縁ではないと言う者もあった。

敢えて名は伏せるが、この家は豪農であり、当主も柔和人柄である。士族でもあり、村議員も務めたこともあるという。

五十六

上郷村の何某という家の娘も、河童らしきものの子を産んだという噂がある。確かな証拠こそないのだが、産まれた子は全身真っ赤で、口は大きく、真に厭な感じのする、気味の悪い子だったそうである。

あまりにも忌まわしいので棄ててしまおうと決め、その家の者はこの不吉な子を携えて、村外れの道違えの処まで持って行った。道違えというのは追い分け、つまり分かれ道の分岐点のことである。

道の分かれ目に赤子を置き去りにした。

振り向かず歩いて一問ばかり離れ、そこで何某はふと思い直した。

惜しくなったのだ。可哀想に思った訳ではない。見世物小屋にでも売り払えば金になるだろうと、そう思ったのである。

欲に駆られて立ち戻ったが、もう赤ん坊の姿は見えなくなっていた。

何者かが取り隠してしまったのだと、その人は思ったそうである。

四十五

歳を経た動物は、様々に怪しい行いをする。それを経立と呼ぶ。

猿の経立は、能く人に似て、女色を好み、村里の婦人を盗み去ると謂う。

松脂を体毛に塗り、その上から砂を付けて固めているから、毛皮は鎧のように硬くなっていて、鉄砲の弾も通らないのだと謂う。